

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.170

July 2009

「やり直しのきく文化の象徴としてのオバマ大統領」

田 中 久 男

アメリカ合衆国の第44代大統領のバラク・オバマが、選挙キャンペーンで前ブッシュ政権の墮落と停滞に変革をもたらすスローガンとして使った“*Yes, we can.*”（「そう、やれば可以的」）は、アメリカの聴衆には実に快く響いたはずである。というのは、燎原の火のように支持者を捉えたこの合言葉は、“*Yes, we can change.*”の意味だと大半のアメリカ人が考えているように、アメリカの建国の歴史を喚起し、国民精神の神髄をずばり言い当てているモットーであるからだ。このキャッチ・フレーズを聞いたとき、私にはすぐ例のギャッツビーのセリフが思い出された。F・スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャッツビー』（1925）の語り手ニック・キャラウェイが、かつての恋人デイジーを取り戻して、青春のやり直しを図ろうとするギャッツビーに向かって、「*ばくだったら彼女に過大な要求はしないな。過去は繰り返せないんだよ*」と小賢しく諭すが、それを聞いたギャッツビーは、信じられないとでも言うように、“*Why of course you can!*”と、大声で切り返すあのセリフである。この「過去は繰り返せる」という強い信念は、「やり直しがきく」というアメリカの国民的な心性の表明であり、作者がおそらく共感を寄せているはずの主人公の「人生の可能性に対する高感度の感受性」は、世界のいたるところからアメリカに渡った人々を絶えず鼓舞してきた「アメリカの夢」という魔力的な言葉に通ずるものである。

これに関連して思い出されるのは、トマス・ウルフの2作目の長編小説『時間と河』（1935）の一場面である。24歳の主人公エズラ・ガントがイギリスのオクスフォードの宿を引き払うとき、そこの娘イーディス・コウルソンから、「過去の失敗で一切が駄目になることなど決してなく、いつも明日が待っていて、新たな出発ができる」と確信できるというのは、本当にすばらしいことよね」と、再出発の可能性を絶えず保証しているかに見える若い国アメリカの若者であることを羨ましがられる。たとえ現実には幻影であっても、とにかくいつでも出直

しがきくという信条が生きた感覚として持てる限り、それは神話的な力を発揮する。今回のオバマ大統領の登場は、そうしたアメリカ流の再生にける大衆の夢の力によって可能になった現象のように思われる。

しかし、過去に引きずられることなく、いつでも出直しがきくという変革の熱意を示しながら、同時にオバマ大統領は、自分とアメリカの歴史を形成した偉人とのつながりをも強調した。彼は黒人だから、本来なら人種的な負の遺産としてまといつく暗い過去を振り払い、政治家としては、これから実現されるはずの明るいヴィジョンを強調して、大衆の熱気に迎合してもよかったはずなのに、彼は冷静にサポーターの熱気を冷ましながら、しかし、したたかにヒーロー願望、英雄崇拜という国民の魂の故郷に訴えかけるというレトリック（それが通常のレトリックという浮ついた響きを持たないところが彼の誠実さの証である）を駆使した。つまり彼は、リンカーン大統領、ローズヴェルト大統領、キング牧師の偉業にあやかり、彼らの威光を借りようとするかのように、自分の目指すべき道筋を彼らとのつながりの中に見定めようとしたのである。選挙戦では変革を叫んで、エスニック集団だけでなく草の根の大衆を歓喜させて期待を膨張させ、大統領就任の暁には、自分の果たすべき役割が困難であることの認識を前面に出し、それを歴史の流れの中に置いてみせるという鋭い歴史感覚によって、アメリカ社会の中枢部を形成してきたワズプや準ワズプ集団を安心させるといふ、心憎いばかりの絶妙のバランス感覚を見せつけた。この優れたバランス感覚によって、黒人という出自のゆえに起きかねなかったオバマ大統領の政権の危険度は急速に希薄化し、彼なら何かをやってくれるという熱い期待感を国民に与えたことは間違いない。そこにこそ、「マジック・オバマ」の本領はあったと私には思われる。「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」とは誰かの箴言だが、彼は賢者として歴史意識を研ぎ澄まし、歴史に残る大統領の一人となるだろう。

（福山大学教授・広島大学名誉教授）

アメリカ大使館賞の募集

—日本で学ぶ大学院生対象の旅費援助奨学金—

アメリカ合衆国大使館からの特別基金提供による旅費援助奨学金の募集を行います。ワシントン D.C.で開催される OAH (Organization of American Historians) の年次大会に 1 名の大学院生を日本から派遣します。

期間：2010 年 4 月 7 日-4 月 10 日

場所：ワシントン D.C./ヒルトン・ワシントン

OAH ホームページ参照：<http://www.oah.org/meetings/2010/>

奨学金の金額：1,500 ドル

応募資格：

1. アメリカ学会の会員であること。
2. 日本の大学の大学院博士課程に在籍し、専任職に就いていないこと。
3. OAH 大会の開催時に日本からの旅費を要すること。
4. 日本国籍あるいは日本永住権を有すること。
5. 渡米時に 45 歳未満であること。

審査結果：2010 年 1 月末日までに、学会 HP 上で公表する予定です。

応募を希望される方は、以下の書類を 2010 年 1 月 14 日までに、アメリカ学会事務局 office@jaas.gr.jp に e-mail で送ってください。

なお、事務局での混乱を避けるため、応募メールの件名は「OAH 大使館賞応募（2010）」と必ず明記してください。

1. 履歴書
2. 出版業績リスト（ある方のみ）
3. 過去の ASA と OAH 年次大会への参加記録（ある方のみ）
4. アメリカ研究へのあなたの関心と博士論文のための研究計画（英語で 500-600 語）
5. 今回の OAH 年次大会で口頭発表を予定している方は、そのペーパーのタイトルと簡略な要旨

国際委員会

アメリカ学会清水博賞の第 14 回受賞作品と第 15 回公募のお知らせ

故清水博会員および同夫人からの寄付金を基金として、「アメリカ学会清水博賞」が 1996 年度から設けられております。同賞は、若手会員による最初の単著として刊行された著書のなかから特に優れた作品を毎年数点程度選び、賞状と賞金 5 万円を贈るものです。

今回は、学会内に新設された清水博賞選考委員会からその審査結果をお届けいたします。第 14 回清水賞候補作品は、2008 年 4 月 1 日から 12 月 31 日の期間に出版された著書のなかから、自薦・他薦で 12 点がプールされました。その後、外部査読・内部査読を経て、厳正な審査の結果、以下の 2 点の作品が受賞されました。今回は、会員 36 名の皆様に外部査読者として当委員会の審査にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

第 14 回受賞作品（著者名の 50 音順）：

倉科一希『アイゼンハワー政権と西ドイツ—同盟政策としての東西軍備管理交渉—』

ミネルヴァ書房（2008/6）

諏訪部浩一『ウィリアム・フォークナーの詩学—1930-1936』

松柏社（2008/10）

次回の審査に向けて会員諸氏のご協力をお願いいたします。当該期間（2009 年 1 月 1 日～2009 年 12 月 31 日）に刊行された著書で、該当する研究にお気づきの会員（自薦も可）は、2010 年 1 月 10 日までに事務局（office@jaas.gr.jp）宛にお知らせください。

清水博賞選考委員会

『アメリカ研究』の電子アーカイブ化についてのお知らせ

会報 4 月号（No. 169）でもお知らせいたしましたが、日本学術会議の進めている学会誌の電子アーカイブ化事業に協力し、また本学会誌『アメリカ研究』が多くの人々の目に触れるよう、本誌バックナンバーの電子アーカイブ化の話を常務理事会にて議論してまいりました。この度、同事業を具体的に推進している、科学技術振興機構（Japan Science and Technology Agency）：通称 JST に、アメリカ学会が応募・採択され、本誌のアーカイブ化の作業に入ることになりましたこと、会員の皆さまにお知らせ致します。本誌に執筆された著者の方々におかれましては、オンライン上での本誌の公開につきまして、ご了解を頂ければ幸いです。詳細につきましては、学会ウェブサイト、会報、年次大会の総会においてご案内いたします。

アメリカ学会常務理事会

アメリカ学会 2008 年度会務報告

1. 会員数

今年度は 73 名の新入会員があり、2008 年度末（2009 年 3 月 31 日現在）の会員数は 1177 名である。

会員数の増減： 2006 年度末比、+16 名
新入会員： 73 名
退会員（含む逝去者）： 58 名（会費払済み退会 27、途中自発退会 11、逝去 3、未納除籍 17）
復 帰： 1 名

2. 年次大会

2008 年度年次大会（第 42 回）は、「会報」第 166 号に掲載された要領に従い、2008 年 5 月 31 日～6 月 1 日に同志社大学において開催された。昨年に引き続いて American Studies Association (ASA) と提携のもとに 3 名のアメリカ人研究者と韓国アメリカ学会に所属する 2 名の韓国人研究者の参加を得て、英語による 2 つのワークショップが設けられた。また、ASA 会長、Vicki Ruiz 教授による講演が実施された。

3. 年報

年報『アメリカ研究 (The American Review)』第 43 号を本年 3 月に刊行した。（詳細は個別事業報告）

4. 会報

「アメリカ学会会報 (The American Studies Newsletter)」, 第 166 号 (4 月), 167 号 (7 月), 168 号 (11 月) を発行した。

5. 英文ジャーナル

英文ジャーナル, The Japanese Journal of American Studies 第 19 号を 2008 年 6 月に刊行した。（詳細は個別事業報告）

6. 学会名簿の発行

アメリカ学会名簿を発行。

7. アメリカ学会清水博賞

2008 年度（第 13 回）アメリカ学会清水博賞を第 42 回年次大会総会で以下の 3 名に授与。

高光佳絵

『アメリカと戦間期の東アジア—アジア・太平洋国際秩序形成と「グローバリゼーション」』（青弓社 2008 年 3 月）

平体由美 『連邦制と社会改革—20 世紀初頭アメリカ合衆国の児童労働規制—』（世界思想社 2007 年 6 月）

村田勝幸 『〈アメリカ人〉の境界とラティノ・エスニシティ—非合法移民問題の社会文化史—』（東京大学出版会 2007 年 6 月）

8. ホーム・ページの充実

広報・電子化情報委員会の主導で展開。（詳細は個別事業報告）

9. 国際委員会

- ASA から派遣される年次大会ワークショップにおける報告者の選定を進めるとともに、Organization of American Historians (OAH) 派遣講師の選定と受け入れ先校を決定した。（詳細は個別事業報告）
- OAH との提携による日本短期滞在プログラムは下記の 2 名が 2 大学で短期間講義あるいは講演を行った。（講師（所属機関）、受入機関/受入責任者の順に記載）

Gary Okihiro, (Columbia University) 琉球大学/山里勝己,

Elain Kim (University of California, Berkeley) 早稲田大学/小林富久子

- 日米友好基金グラント、アメリカ研究振興会等の補助により以下の派遣と招聘を行った。

[派遣] ASA (米国 Albuquerque) へ：阿部珠理 (立教大学), 谷中寿子 (共立女子大学)

American Studies Association of Korea (ASAK) (韓国ソウル) へ：有賀夏紀 (埼玉大学), 川島浩平 (武蔵大学)

OAH (米国 Seattle) へ：阿部珠理 (立教大学), 川島浩平 (武蔵大学)

在米大学院生対象の旅費補助プログラムに関しては、ASA (アルバカーキー) 年次大会 (10 月 16 日～19 日) に 2 名, OAH (シアトル) 年次大会 (3 月 26 日～29 日) に 5 名の助成を行った。

[招聘] ASA: Vicki Ruiz (University of California, Irvine), Nikhil Pal Singh (University of Washington), Linda Trinh Vo (University of California, Irvine)

ASAK: Seong-Kon Kim (Seoul National University), Jin Hee Kim (Kyunghee Cyber University)
アメリカ大使館賞は ASA (アルバカーキー) 年次大会 (10 月 16 日~19 日) の参加助成を, 板橋晶子 (お茶の水女子大学大学院在籍中) 会員が受賞。
OAH (シアトル) 年次大会 (3 月 26 日~29 日) の参加助成を, 久野愛 (東京大学大学院在籍中) が受賞。

10. 研究会の開催

今年度の活動としては下記の研究会, 11 件を共催した。

東京大学アメリカ太平洋地域研究センターとの共催で 7 件。東大本郷フェノロサ学会主催で 1 件, 上智大学との共催で 2 件。同志社大学アメリカ研究所との共催で 1 件。

東大駒場・センター関係

2008

- 6.18 Greg Robinson (Univ. of Kebec), “Farewell to Little Tokyo”
- 6.25 Monisha D. Gupta (Univ. of Hawaii), “Remembering 9/11 Vernaculars of Trauma”
- 12.3 Roger Robins (Marymount College), “From Piety to Politics: The Social Evolution of Modern Pentecostalism”

2009

- 1.13 David D. Hall (Harvard Divinity School), “Print Culture and Pacific Opinion in Early America: Rethinking the Connections”
- 1.27 Susan Smulyan (Brown Univ.), “Perry Arrives in Japan: Cultural Diplomacy in Old Manuscripts and New Media”
- 3.16 Eric Foner (Columbia Univ.), “From Lincoln to Obama: The First and Second Reconstructions in American History”
- 3.17 Keith Camacho (UCLA); Tritia Toyota

(UCLA), “Changes in Trans-Pacific Dynamics: Colonial Legacies and Current Issues”

東大本郷・日本フェノロサ学会

2008

- 11.22 林 曼麗 (台北国立故宮博物院前院長), 「東西文化交流の先駆者としてのフェノロサ」

同志社大学・同志社大学アメリカ研究科・研究所

2008

- 6.2 Vicki Ruiz (ASA 会長); Seong-Kon Kim (ASAK 会長); Nikhil Pal Singh (Univ. Washington); Linda Trinh Vo (University of California at Irvine); Jin Hee Kim (Kyunghee Cyber Univ.); Gary Okihiro (Columbia Univ.); Victor Becerra (University of California at Irvine); Keiko Ikeda (Doshisha Univ.); Takashi Sasaki (Doshisha Univ.); Eunyoung Cho (Doshisha Univ.), “Can American Studies be a Tool for Political Transformation Outside of the Academy?”

上智大学・上智大学アメリカ・カナダ研究所

2008

- 7.18 Stephen. H. Smida (Univ. Washington), “The Continuing Problem of Reading American Literature”

2009

- 1.15 David D. Hall (Harvard Divinity School), “Literature and Religion in Antebellum America, from Catharine Maria Sedgwick to Harriet Beecher Stowe”

11. その他

1. 学術会議地域研究委員会について
学術会議地域研究委員会の活動と今後の課題について, 学会への報告がなされた。
2. 齋藤眞先生のご遺族よりの寄付金の使途について, アメリカ学会の年報等に掲載された論文のなかから優秀作品を選んで顕彰する「齋藤眞賞」(仮称) の設置が検討されている。

以上

2008 年度決算および 2009 年度予算

さる 6 月 7 日の総会において 2008 年度決算および 2009 年度予算についてご承認頂きましたが、ここに決算書および予算書を掲載し、会員各位へのご報告とさせていただきます。なお、2008 年度の確定決算書は、出納帳

簿その他の関係書類とあわせて、島田法子、白井洋子、松田武各監事の監査を受け、3 監事から、決算を適切と認める旨の監査報告書が会長宛に提出されています。
(財務担当 遠藤泰生)

2008年度決算および2009年度予算

□収入の部

単位:円 2009/6/9

科 目	2008年度予算	2008年度決算	2009年度予算
1. 年会費	9,000,000	9,604,676	9,000,000
2. アメリカ研究振興会助成金	2,000,000	2,000,000	2,000,000
3. 雑収入	400,000	557,819	400,000
4. 日本学術振興会科研費補助金	800,000	800,092	800,000
5. 日米友好基金	730,000	338,000	650,878
6. 広告収入	370,000	370,000	344,000
7. 年次大会シンポジウム補助金(アメリカ研究振興会)	0	0	270,000
8. 寄付金	1,283,500	1,472,500	0
9. 前期繰越金	6,880,796	6,880,796	8,445,618
合 計	21,464,296	22,023,883	21,910,496

□支出の部

科 目	2008年度予算	2008年度決算	2009年度予算
1. 会務費(計)	5,280,000	4,817,756	5,340,000
01) 事務局人件費	2,800,000	2,911,450	2,900,000
02) 理事・評議員会費	130,000	150,000	100,000
03) 常務理事会費	300,000	304,565	300,000
04) 会長選挙関係費	0	0	20,000
05) 会務郵送通信費	220,000	171,412	220,000
06) 事務用品費	250,000	195,291	250,000
07) 名簿作成積立費	300,000	300,000	300,000
08) コピー関係費	450,000	472,615	450,000
09) 設備予備費	180,000	43,735	180,000
10) ホームページ関係費	30,000	28,000	30,000
11) 広報・電子化情報委員会費	210,000	88,861	180,000
(1) 委員会費	70,000	0	40,000
(2) プロバイダー通信費他	140,000	88,861	140,000
12) 口座振替・郵便振替手数料	110,000	102,327	110,000
13) 会務雑費	300,000	49,500	300,000
2. 研究事業費(計)	9,230,000	8,760,509	9,340,000
1) 年次大会費	2,180,000	2,213,675	1,940,000
(1) 準備費	510,000	521,743	510,000
(2) 大会費	800,000	933,932	900,000
(3) 外国人研究者旅費	870,000	758,000	530,000
2) 年報刊行費	2,100,000	2,184,111	2,100,000
(1) 年報編集委員会費		256,000	
(2) 年報印刷費		1,634,700	
(3) 年報郵送通信費		142,044	
(4) 年報雑費		151,367	
3) 英文ジャーナル刊行費	2,300,000	2,263,517	2,600,000
(1) 英文編集委員会費		146,000	
(2) 英文印刷費		1,523,077	
(3) 英文郵送通信費		362,564	
(4) コピーエディター費			
(5) 英文雑費		231,876	
4) 会報刊行費	950,000	956,056	950,000
(1) 会報印刷費		563,745	
(2) 会報郵送通信費		265,481	
(3) 会報雑費		126,830	
5) 国際交流活動費	950,000	741,890	950,000
6) 研究活動費	600,000	401,260	600,000
7) 清水博賞委員会費			50,000
8) 研究事業予備費	150,000	0	150,000
小 計	14,510,000	13,578,265	14,680,000
4. 次期繰越金	6,954,296	8,445,618	7,230,496
合 計	21,464,296	22,023,883	21,910,496

菅 英輝 編著

『アメリカの戦争と世界秩序』

(法政大学出版局, 2008 年, 3,990 円)

アメリカは「自由の国」であり、理念と文化の力、経済の力、そして時に軍事力を用いて、自由主義と民主主義を世界に広めてきた歴史がある。アメリカ研究者は、イラク戦争を経験した今日、その問題を特に「戦争」とのかねあいで考察することが避けて通れない。

本書の表紙を見ると、標題とともに「アメリカの戦争とリベラルな世界秩序の形成」という意味の英語が併記されている。編著者によれば、アメリカがリベラルな世界秩序の形成をめざすことと、戦争を引き起こすこととの相互関係は、これまで十分に検証されてこなかった。そこで、本書では、「アメリカの戦争とリベラルな世界秩序の形成」が生み出すさまざまな問題を総合的に検討することが試みられている。

本論は2部構成となっており、アメリカの戦争を国際社会とのかかわりで考察する5つの章（アメリカ帝国主義論の新展開、アメリカの戦争のやり方、ローズヴェルト系論の対外政策、湾岸戦争からイラク戦争へ、UNHCRとアメリカ）と、国内社会の視点から考察する7つの章（正しい戦争と不正な戦争、アメリカ市民社会と戦争、「アメリカの戦争」における道徳的文法の系譜、イラク戦争とメディアの敗北、戦争の経済コスト、アメリカ独立戦争とワシントン神話の形成、戦争の克服と「和解・共生」）から成る。

本書の標題からはアメリカ研究よりも国際政治学の分野に近い印象を受けるかもしれないが、このように本書は、アメリカの戦争を国際社会と国内社会の両側から多面的に分析・記述しようとする内容となっている。アメリカが戦争を通じて世界秩序を形成していくという面もあれば、それと同時に戦争がアメリカ社会に影響を及ぼす面もあり、両者の間にはダイナミックな相互関係があることが想定されるからである。

もっとも、本書は、12名の執筆者による論文集であり、戦争を媒介してアメリカ社会と国際社会が連動するメカニズムについて明確な結論が示されるわけではないが、編著者の歴史観は「序章 アメリカ外交の伝統とアメリカの戦争」の中に垣間見ることができる。

それによれば、19世紀以降のアメリカの帝国主義的膨張の基本要因は「門戸開放帝国主義」という枠組みでとらえられる。経済的権益の確保はアメリカ外交のもっとも重要な目標である。イラク戦争においては、石油の安定的確保、中東におけるヘゲモニーの維持、イスラエルの安全という戦略的考慮がもっとも重要であり、中東の民主化は優先順位の低い目的ではなかった。それは、第一義的には、世論に対して戦争の正当性を訴える狙いで開戦の理由に挙げられた。

本書は、アメリカ研究者の学問的および実践的な関心が交差する重要なテーマに挑んだ意欲的な企画であり、ぜひ多くの読者に読まれることを期待したい。

(桜美林大学 西岡達裕)

上坂 昇 著

『神の国アメリカの論理——宗教右派によるイスラエル支援、中絶・同性結婚の否認』

(明石書店, 2008 年, 2,940 円)

この紹介文が掲載される頃には、オバマ大統領の実績評価も十分になされていることであろう。オバマ「候補」は反キリストか、という議論が始まる本書が、何だかずいぶん昔の話をしているように聞こえるとしても、それは時事評論的な著作の宿命と言うほかない。だが本書には、それを越えて継続的な意義をもつ貴重な情報もふんだんに盛り込まれている。著者はアメリカの宗教右派をその内部論理に沿って理解することを求め、「イスラエル支援」「妊娠中絶」「同性愛」という三つの軸を立ててこれを具体的に検討している。

そもそも、アメリカはなぜあそこまでイスラエルに肩入れするのか。ユダヤ人は人口比にして2%弱しかいないのに、アメリカでは一般大衆も圧倒的にイスラエル寄りである。この不思議を扱っているのが最初の主題である。問題の鍵を握るのは「クリスチャン・シオニズム」であるが、本書を知らぬおおかたの人には、なぜキリスト教徒がユダヤ人のパレスチナ帰還に強い関心をもつかが理解できないであろう。それは、聖書にある特定の原理主義的な流儀に従って読むと、ユダヤ人の帰還こそがキリスト再臨と終末到来の前提条件だと考えられるからである。なお、ここには「メシアニック・ジュー」ないし「ヘブル・クリスチャン」という聞き慣れない呼び名の人々が登場するが、日本ではほとんど紹介されたことがないので、これも本書の貢献の一つであろう。

一方、妊娠中絶という二つめの主題をめぐる議論は、すでに本邦でも多々紹介されているが、本書はロウ判決以後の出来事や資料をていねいに渉猟して解説を加えており、歴史的経過のおさらいにも便利である。ここは強硬なフェミニスト論客の主張が飛び交う領域なので、下手をすると単なる情報整理だけでも火傷を負いかねない。その中で評者が好感を覚えたのは、著者が数々の統計資料や世論調査をきちんと踏まえた上で、なおそれらの数字だけで国民の意見を計ることの難しさを嘆いているところである。歴史家は何の裏付けもなしにドラマを仕立て上げるわけにはゆかないが、さりとて数字を並べれば自然と歴史がドラマになるわけでもない。

中絶論争の歴史はせいぜい前世紀からだが、同性愛をめぐる議論には紀元前からの長い歴史の蓄積があり、かつ現代神学や聖書解釈学の知見が関与する割合も大きい。生物学や倫理学や文化論など、多方面からのアプローチも必要な主題で、評者の訳書や論文も何点か参看していただいてあるが、これだけの短いスペースでそれらを見渡すのはさぞ難しかったであろう。著者はみずからも不案内な尋ね人としてこの論争に取り組んでいるため、予備知識のない者にも親切でわかりやすい説明になっている。同性愛は普遍的だが、アメリカではそれが独特な余波を伴って現象する。そこにアメリカの固有性を見ようとする著者の着眼は正しい。

森本あんり（国際基督教大学）

リリアン・E・スミス著、廣瀬典夫 訳・著
『リリアン・E・スミス『今こそその時』——
「ブラウン判決」とアメリカ南部白人の心
の闇』

(彩流社, 2008 年, 2,940 円)

本書は、二部構成で第Ⅰ部のリリアン・スミスの著書『今こそその時』の翻訳と、第Ⅱ部の翻訳者による考察「ポストコロニアリズムの時代におけるリリアン・E・スミスの再評価」から成る。第Ⅰ部の『今こそその時』は、ブラウン判決を高く評価したスミスが、その受け入れをアメリカ市民に訴える目的で判決の翌年に出版した書であるが、判決から 50 年経った 2004 年に 49 年ぶりに再版されたことがきっかけとなり、日本語訳出版に至った。第Ⅰ部は 3 部に分かれ、最初の「今こそその時」では、人種隔離の歴史を辿り、隔離の背景にある白人の心の内を分析している。そこでは、白人の不安が隔離を生み出すことが論じられる。そして、その不安が煽動家によって煽られ、ついには隔離が立法化されるというプロセスを明らかにしている。予てより隔離に反対の姿勢を示してきたスミスは隔離された南部について、自分たちを壁で囲って知りたくないことを語りかける科学や批判者から遮断した状態だと批判的に述べている。そして、最高裁の判決が出た今こそ隔離を撤廃し、アメリカに対する世界の不信感を払拭しようと呼びかける。次の「行動や言葉で示すべきこと」では、隔離撤廃に際しどのように行動すべきか実用的な指針が示される。最後にスミスが講演でよく受けた「25 の質問」に答えて締めくくられる。廣瀬氏が指摘するように、人種隔離を「黒人の問題」というよりは「白人の問題」と把握している点が同書におけるスミスの分析の特徴と言えよう。

第Ⅱ部において廣瀬氏は、人生のほとんどをジョージア州で過ごした生粋の南部白人でありながら人種隔離廃止を唱えたスミスの視座が、当時の南部の枠にとらわれることなく際立って今日的であったことを明らかにしていく。氏は、『夢を殺した人たち』『奇妙な果実』等の著作における南部白人の描写をも検討し、スミスがブアホワイト、宗教、父権制社会をどのように捉えていたのかを分析する。そして、隔離を基盤とした南部の支配体制を白人の心を軸に描出し、南部の父権制社会に生きる白人男性の歪みや、南部支配者層が白人優越という論理を利用してブアホワイトを人種隔離装置の一部として機能させていたことなどを暴きだした点に注目し、スミスの視座をポストコロニアルと指摘する。また、同時代あるいは現代の論者と比較検討し、モリソンやサイドとは共有する考え方があり、フォークナーやマクギルらの南部人自由主義者 (liberals) や穏健主義者、アグレリアンとは対立点が見出されることから、スミスをポストコロニアルと位置づける。当時の南部白人女性としては極めて稀に「急進的」であったリリアン・スミスの考え方を、「ポストコロニアリズムに繋がる視座」として考察した第Ⅱ部は、第Ⅰ部の解説にとどまるものではない。『今こそその時』の出版から半世紀が過ぎた今、スミスの位置づけを再考する研究書として意義深い。

(細谷典子)

宇沢美子 著
『ハシムラ東郷——イエローフェイスのアメリカ異人伝』

(東京大学出版会, 2008 年, 2,940 円)

名字をふたつ重ねた「ハシムラ東郷」という名には、いかにも日本好きの外人さんの努力を見る思いがある。うーん、がんばって考えたんだね、でもどっかおかしいよな、というのが第一印象。しかし、本書の表紙を見ると、眼鏡で出っ歯でちょっぴりナヨとしたアジア人像は、確かにどこぞで見たような気がしてきた。オードリー・ヘプバーンの主演映画『ティファニーで朝食を』やサイバーパンク映画の傑作『JM』にも、こういう怪しいオッサンを見かけた気がする。あの連中が「ハシムラ東郷」の子孫なら、御本家たるもの、どこでどのようにその影響力絶大なステレオタイプを作り上げたのか。本書はまさしく、その奇妙な侮辱的(?)日本人像の正体に迫る、謹厳実直にして膨大なるリサーチの賜物である。

ハシムラ東郷とは、ユダヤ系米国人ウォラス・アーウィンのペンネームにして架空の人物であった。日本からカリフォルニアに渡ったスクールボーイの日常がいかに失敗の連続であるか、その奮闘ぶりをエッセイとして書いたところ、好評を博したという。

ではスクールボーイとはなにか? 著者は懇切丁寧に「学僕」と訳される、この謎の職業を紹介している。これはメイドさんがやる仕事を引き受けた日本男児、いわば住み込みのボーイさんのこと。日本では地位も名誉も野心も将来もある男子が、はるばるアメリカくんだりまで留学して一流の知識を身につける……はさすが、ご当地でなんとメイドさんのような仕事に邁進しなければならないとは! なんと哀しい境遇! とそこでつい笑ってしまうわけなのだが、その笑いこそが、実は曲者なのである。著者は、国境を越えるついでに性差と階級の境も超え、哀しさあまって滑稽と成り果てた黄色人学僕のもう真似て売るアーウィン人気の秘密に、メスを入れていく。

なんとも奇妙なイエローフェイス現象だが、日本人にとっては噴飯モノとして映りかねないハシムラ東郷のドジっ子のなかに、WASP 以外のアメリカ人であるアーウィン自身の心情が反復されている、というからおもしろい。

著者はハシムラ東郷の活躍の背景を知るために、同時代のイエローフェイス作家オノト・ワタンナや米国へ渡って日本人詩人としてデビューしたヨネ・ノグチといった作家たちの活躍を論じ、さらにアーウィン自身の他の作品にも目を配る。こんな作家たちがいたのか、という驚き以上に、なぜアメリカ人が日本人作家になりましたのか、なぜ日本人が英語で作品を発表したのかなどなど、未知の世界への興味をかきたててやまない内容だ。

通常ならば日本人差別への糾弾に傾きそうな話題だが、本書は黄色人差別(黄禍)が日本趣味(ジャポニズム)と二律背反であり、侮辱的と同時に魅力的でもあるというアンビヴァレンスにスポットを当てている。この余裕が面白い。冒頭で示したとおり、評者などはまず、外人がどのくらい日本人になれるかという問題に対し、けっこう手厳しい小姑的な鎖國的メンタリティで構えてしまっているのだが、本書はそうした条件反射に対しても慎重なまでに批評的距離を保ち、複雑怪奇な異人種間交流の対話を巧妙なまでに演出しており、さわやかな読後感を与えてくれた。

小谷真理 (SF& ファンタジー評論家)

藤平育子 著
『フォークナーのアメリカ幻想——「アブサロム、アブサロム！」の真実』

(研究社, 2008 年, 5,000 円)

フォークナーが 20 世紀アメリカ文学を代表する作家であり、その代表作が『アブサロム、アブサロム!』(1936) であることは周知のことである。本書はその『アブサロム』と関連作品の徹底的な読解を通して、フォークナー文学理解の 21 世紀的到達を示したものである。

難解をもって知られるフォークナーの作品のなかでも『アブサロム』はとりわけ難解であり、いくつもの「謎」を巡って活発な議論がなされてきた。議論は尽きることがないものの、20 世紀末にはおよそその定説が確立してきた。しかしこの度出版された藤平氏の著書は、それらの定見に疑問を突きつけ、入念な立証の作業を通して新たな解釈を次々と示していく。数多くの創見のなかで最も主要なものは、「語り手たちが隠蔽している」サトベンの《重罪》(フェロニ)が奴隷売買であるということである。また、南部のみならずアメリカ全体が奴隷制度の《重罪》を犯しており、アメリカの夢がその《重罪》によって支えられているという告発である。

その創見をもたらす原動力となるのは次の 2 つの視点である。藤平氏は基本的にフォークナーの諸作品を「南部社会において周縁的な存在とされていた女性、奴隷、黒人たちが、記憶される主体として共同体の歴史に自己を刻印する勇氣」(178)に着目して読解する。その最たるものがローザ・コールドフィールドの役割の積極的見直しである。「フォークナー研究は、長い間、ローザを怒りと憎悪の女と決めつけてきた」(74)として、ローザの物語の読み直しを進める。いま 1 つは氏が「ここ十年ほど、私は、フォークナー作品における笑いや怒りなどの身体表現の《感染力》について考えてきた」(56)と述べる身体への着目である。その白眉は、クライティの手を振り払ったローザが、思考を重ねるうちにむしろ白人優越主義に疑問をもち、苦悩する立場に追いやられ、遂には女奴隷の心の地獄を共有するようになったのだという解釈である。

このような視点を藤平氏が持ち得ているのは、氏がフォークナー研究者であるとともに、トニ・モリスンの研究者であるからであろう。氏にはモリスンについての独創的な著書もあり、本書においてもモリスンの作品、とりわけ『ピラヴィッド』(1987)を鏡として、『アブサロム』とフォークナーの文学を論じている。フォークナーが南部白人男性作家でありながらアメリカの奴隷制や人種主義に対して苦悩し、深い洞察を有していたことの新たな証拠として、氏はクエンティン・コンプソンの祖父の言葉を引用・分析する。この部分への着目は氏のモリスン体験を通してこそ到達しえたものだろう。

本書はフォークナーの文学が今や「アメリカ文学」の範疇を越えて、世界文学となっていることを、近年のフォークナー研究の最新成果を確実にふんだんに取り入れ、完膚なきまでに立証している。「フォークナー研究の現在と未来を見据えることを念頭において書いた」(459)という「あとがき」の通り、本書は現在におけるフォークナー研究の最高の到達点を示している。この本を越えることこそが今後のフォークナー研究に課された大きな課題である。

山下 昇(相愛大学)

諏訪部浩一 著
『ウィリアム・フォークナーの詩学 1930-1936』

(松柏社, 2008 年, 3,800 円)

本書は 2004 年、ニューヨーク州立大学バッファロー分校に博士論文を提出受理された諏訪部氏が、帰国後さらに 7 本の論攷に発展された議論の集大成である。論攷は各々『英文学研究』、『アメリカ文学研究』それに『フォークナー』などに掲載されてきた。

「序章」に続く本論は 2 部構成全 5 章立て。第 1 部「社会的関心の変化」と第 2 部「歴史の重み、そして南部の臨界点」は、最初に各々 20 ページ、15 ページにおよぶイントロダクションを置く。第 1 部の 3 つの章は『死の床に横たわりて』、『サンクチュアリ』それに『八月の光』を、また第 2 部のふたつの章は『標識塔〈パイロン〉』と『アブサロム、アブサロム!』を論じる。各章は独立してひとつの小説を扱うというより、統一的問題意識の流れのなかで各作品を論じるので、どの章も直接対象とする作品ばかりでなく、つながりをもつ多くの作品への言及を含む。

20 世紀前半のアメリカ文化を特徴づけた「男性不安」を、フォークナーも含めたアメリカ作家たちはどのように昇華したかが論じられたあと、議論はフォークナーの社会的関心への深まりと広がりに向けられる。そのさい諏訪部氏は特に女性が作品で果たす役割に注目する。作家が生きた現実の南部社会は家父長制に支配され、女性たちを「称える」ことによって実は抑圧し、レーシズム隠蔽の手段として用いた。だがフォークナーの小説世界にあては、女性たちは「母」か「雌」かという南部ジェンダーイデオロギーへの反逆者となる。そのため彼女たちと関わる男性は「解消され得ない男女間の葛藤」に直面する。だが、こうした状況からこそ、フォークナーの作品を特徴づける対位法的語りが生まれる。

フォークナーの女性たちが男性とどうかかわり、両者の抜き差しならぬ関係のなかで、南部社会のいかなる側面が浮かび上がり、どのような語りが生まれたかを追究した諏訪部氏が最後に達した結論とは、フォークナーも結局は環境に支配される「歴史的産物」、「保守的な白人南部男性」だったということである。ただし、これはフォークナーの評価を貶めることになるわけではない、とも氏は強調する。自らが置かれた文化的宿命のなかで、その宿命に真摯に対峙したことこそが、彼の真価なのだ、と。

本書一読、自家菜園中の物よろしく、比較的初期のものから直近に至るまで、おびただしい量に達するフォークナー研究の蓄積成果を、諏訪部氏が持論展開のなかに要約紹介される、その手際の良さに読者は印象づけられよう。本邦フォークナー研究が本格化したのは 1960 年代だったが、本書は半世紀のあいだにわが国のフォークナー研究がどこまで進展したかを示す、ひとつの指標となろう。観念的難解表現がときに顔を出すようで、理解のためには反芻が必要となって読み解くのに時間がかかるが、その苦労を補って余りある優れた研究書。

杉山直人(関西学院大学)

武藤脩二 著

『世紀転換期のアメリカ文学と文化』

(中央大学出版部, 2008 年, 3,800 円)

本書は南北戦争後から 20 世紀初頭にかけてのいわゆる「金鍍金時代」のアメリカ文学と文化を多面的に論じたものである。この時代はアメリカン・ルネサンスと 1920 年代という「輝かしい」文学史区分に挟まれ、ややもするとその両区分の橋渡しの期間として片づけられやすいが、武藤氏はアメリカ文学・文化の連続性と変化を俯瞰的に見ることで、この時代の特性を再発見し、重層的に考察しようとする。

武藤氏の批評スタンスは歴史を連続的な流れとして捉えるだけでなく、文化の共時的でグローバルな相互作用にも目を向け、その両軸が交差するときの豊かで複雑な諸相を捉えようとする点にある。たとえば 1 章では、ハーバード大学で英文学を教え、優れた文芸批評家でもあったトマス・サージェント・ペリーが慶應義塾大学で教鞭を執るに至る経緯から、彼の日本観とラフカディオ・ハーンの見た日本との違い、またその文学史観における進化思想の影響や夏目漱石にも見られる同様の要素など、歴史的・地理的な文化の相互作用のあり様が連鎖的に語られる。あるいは、ローマのコロセウムの表象をめぐる 6 章では、バイロン、ゲーテといったヨーロッパの文人たちから、ポー、ホーソー、トウエイ、ジェイムズ、ウォートンへと続く流れを概観しながらも、そこに見られる「芸術と倫理」との相違が「南と北の精神の差異」であるという指摘や、ロマン派以降、コロセウムは衛生思想の影響を受け、「実際の・科学的理解」によって表

象されるようになるという指摘など、ダイナミックな分析を展開する。

このような文化的共振は、11 章からなる本書全体に表れる。その基底にあるイメージは「漂流」であるが、その他の部分でも共鳴し合っているように思われる。3 章で論じられるボストン・ブラーミンの（白人優位の）意識と文化は、ペリーやその妻の印象派画家リーラ（2 章）と響き合い、さらにそれが失われることへの危機感を抱いたロバート・ローエル（8 章）ともつながる。あるいはまた、6 章で分析される自然に覆われたコロセウムの廃墟は、最終章で論じられるニューイングランドの荒廃とも重なるが、両者の表象の差異が、「漂流」として表現されたフロストのエマソンからの隔たりとしても認識される可能性を秘めている。

本書のように奥深い広がりのある研究は、狭い専門領域に囚われた研究者の限界も指し示してくれる。ジェイムズ兄弟やフィッツジェラルドに流れるアイリッシュ系の血の重要性と、「ブラック・アイリッシュ」の影響力が増大した時代に現れた「アングロサクソン・アメリカン」の「スコッチ・アイリッシュ・アメリカンに対する隠微な差別意識」（3 章）や、エマソンの『志願兵』に見られる戦争レトリックの系譜とヘミングウェイによるそのようなレトリックの否定（7 章）などの指摘は、作家による個別研究では決して得られない慧眼である。

このような時空間を縦横無尽に駆けめぐる本は、長年にわたって地道な研鑽を積んだ人にしか書けない研究書であり、読者にとってはいささか厄介な本である。というのも、こういった本は再読を迫るからであり、かつ再読に値する本であるからだ。

野口啓子（津田塾大学）

第 44 回年次大会企画・報告募集のお知らせ

第 44 回年次大会が 2010 年 6 月 5 日(土)、6 日(日)に大阪大学吹田キャンパスで開催されます。会員のみなさまの企画提案やご報告希望を下記の通り募集いたしますので、ご協力をお願いいたします。なお、すべての応募は事務局 <office@jaas.gr.jp>宛に、1~3 のうち該当する件名を明記したうえで、それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

1. 「自由論題報告申し込み」(締切日: 11 月 20 日)

報告テーマおよび 1500 字程度の要旨(キーワードを 5 つ明記のこと。)

2. 「シンポジウムならびに部会の企画提案」(締切日: 8 月 31 日)

シンポジウム・部会の別、テーマおよび 800 字程度の要旨(報告者案があれば、合わせてお願いします。ただし、第 42・43 回大会の部会・シンポジウム・ワークショップでの報告者は、第 44 回大会の部会・シンポジウム・ワークショップでは報告できません。)

3. 「分科会開催申し込み」(締切日: 8 月 31 日)

分科会趣旨(400 字以内)、分科会連絡責任者名および賛同者 5 名の氏名

(継続の分科会も、その旨お知らせください。)

なお、全ての企画内容の最終決定は、年次大会プログラム委員会の提案に基づいて常務理事会で行いますので、その旨ご了解ください。

年次大会プログラム委員会

英文ジャーナル編集委員会からのお知らせ

1 英文ジャーナル 21 号 英文書誌 (2008) の募集について

2008 年に英語で書かれた著作、論文（博士論文を含む）に関する情報を同封別紙にタイプで記入（コンピューター作成原稿を貼付けても結構です）のうえ、9 月 20 日までに学会事務局宛お送りください。指示された形式に従って原稿を作成してくださいよう御願いたします。

2 英文ジャーナル 22 号 (2011 年 6 月発行) への投稿について

学会英文ジャーナル 22 号 (2011 年 6 月発行) へのご投稿を計画されている会員は、次のような日程になっていますので、ご注意ください。

22 号の特集テーマは“Affluence and Poverty”です。原稿応募申し込み（論文要旨）の締め切りは 2010 年 1 月，原稿締め切りは 2010 年 5 月です。詳しい日程については、11 月の会報をご覧ください。なお、『アメリカ研究』との二重投稿，あるいは日本語，英語を問わず他の雑誌に発表したものと同じ内容の投稿はご遠慮ください。

英文ジャーナル編集委員会

新入会員

今井祥子	東京大学	米 衆 民
馬場広信	早稲田大学	英 文 民
GRINSHUPUN, Helena	京都大学	衆 女 社会人類学
鈴木元子	静岡文化芸術大学	文 米 日
飯山雅史	読売新聞東京本社	政 外 ラ
末次俊之	専修大学	政 史 外
水谷裕佳	北海道大学	民 米
井上弘貴	早稲田大学	政 思
前田一平	鳴門教育大学	文 民 史
佐久間由梨	ウイスコンシン大学マディソン	文 教 芸
高山裕二	早稲田大学	政 思 宗
小島美枝子	津田塾大学	女 宗 教
青砥吉隆	国際基督教大学	科 思 衆
大地真介	広島大学	文 米 芸
竹本周平	東京外国語大学	外 政 史
吉岡由佳	神戸大学	民 文 芸
飯田 健	早稲田大学	政 社
菅原大一太	嘉悦大学	文 米
藤村好美	群馬県立大学	教 史 米
黄 盛彬	立教大学	社 衆 日
西川秀和	大阪大学	政 史 外
林 直生	滋賀大学	文 衆 米
藤田尚則	創価大学	法 宗
(株) アティーナ・プレス		維持会員

編 集 後 記

M. ジャクソンの死から四週間が経ち、いまだに様々な憶測が届けられてくる。M. モンローや J. F. ケネディの死と同様、彼の死も我々から語る言葉を引き出し続けていくのであろう。PV「スリラー」には terror, horror, terrorize といった言葉がちりばめられているが、誰が誰を怖が

らせるというのか？ テレビ画面でくり返し流されたあのダンスシーン。怖がる彼女をガードすべきマイケルが、墓から出てきた化け物 (ghouls) の群れに混じって踊っている。M. ジャクソンは脅そうとしたのか脅されていたのかと考えている。

(SM)

2009 年 7 月 30 日 発行

ア メ リ カ 学 会

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科附属
アメリカ太平洋地域研究センター気付
Tel & Fax (03) 5454-6163
http://www.jaas.gr.jp

発行人 有 賀 夏 紀

編集人 中 條 献

印刷所 啓文堂松本印刷

〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町 565-12